

2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部	教授	水野 伸子
最終学歴	学位	専門分野
京都市立芸術大学大学院 音楽研究科 音楽学領域 博士(後期)課程修了	博士(音楽学)	音楽心理学, 音楽教育学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

多角的な視点から、問題の本質を見抜き解決策を導き出す能力の育成

【目標】

- ・「生存価」の観点から音楽を問い直す授業法を開発する
- ・批判的に思考し客観的に記述する能力を育成する

【方針】

教育理念に基づき、各科目の特性に応じた資質・能力の育成を図る

【計画（方法）】

それぞれの授業において、特に以下のことを重点課題として取り組む。総合教養科目の担当授業では、歴史的に対極した事例を紹介し音楽の生存価について考えさせる。教員養成科目では、特に日本音楽と日本民族の関係に焦点を当て、西洋音楽との対比から日本人における音楽の生存価について体験的に考えさせる。保育者養成科目では、音から音楽を作る実践を取り入れることにより、演奏再生に偏らない創造的な音楽活動を構成する能力を養成する。ゼミでは1段落構成の「200字作文」の取り組みを継続して行い、随時添削して返し指導する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

音楽と社会, 音楽科教育法, 音楽基礎, 幼児と音楽表現, 音楽表現技術特別演習,
専門演習Ⅰ, 専門演習Ⅲ

（後期）

保育内容（音楽表現）, 専門演習Ⅱ, 専門演習Ⅳ, 卒業研究

○教育方法の実践

1. 「生存価」の観点から音楽を問い直す授業法の開発

一般に音楽は娯楽の一つとして捉えられがちである。しかし歴史を振り返ると、音楽は人々を良くも悪くも鼓舞してきたことが分かる。例えば、東ティモール独立闘争下における民衆の歌と踊り（Tebe-tebe）や、プロパガンダとして利用されたワーグナーの作品などがその代表例である。また、個人がiPodなどで日常的に聴く音楽も、人を励まし勇気づける力をもつ。このような側面に着目し、音楽には「生存価」があるのではないかという観点から授業内容の再構築を試みた。

「生存価」とは進化心理学において用いられる概念であり、種の生存や存続に寄与する性質を指す。本授業では、この「生存価」を手がかりに、音楽を社会的側面と個人的側面の両面から捉え直し、学生自身の音楽観の再構築を目指した。

社会的側面については、前述の事例および関連資料をまとめたテキストや映像をもとに、学生がWebbing Mapを作成しながら思考の可視化を行い、検討を深めた。その後、考察内容をレポートにまとめ、クラス内で共有した。一方、個人的側面では、学生各自が好む音楽を分析し、楽曲の背景なども調べることで、自身がどのような要素に魅力を感じているのかを考察した。これらの成果は発表資料として整理され、授業内での交流を通して共有された。

このように、「生存価」という視点から「音楽と社会」「音楽と自己」との関係を多角的に掘り下げた結果、学期末レポートからは学生の音楽観に一定の変容が生じたことが示唆された。保育者・教育者を志望する教育学部の学生にとって、音楽を正誤や優劣ではなく「生存価」という観点から捉える経験は、今後音楽を指導するうえでの重要な基盤となるものである。

2. 批判的に思考し客観的に記述する能力を育成する

常に携帯するスマートフォンから容易に情報を取得し、生成AIを用いて文章をまとめることができる現代の若者にとって、「考える」とはなぜ必要なのか。この問いを出発点として3年次の「専門演習」を開始した。続いて「ミニ研究」と位置づけ、問いの設定から方法の選定、結果の整理、考察、結論の導出に至るまでの一連のプロセスを実践した。成果はパワーポイントにまとめ、卒業研究発表会と同様の大教室において、ゼミ内発表会として実施した。これは、3年次の段階で卒業研究の流れを一通り経験させることを目的としたものである。

学生が設定したテーマは、「風営法改正後のホストクラブの変化」「103万円の壁はいつ上げられるのか」「『推し活』文化が社会に与える社会的・経済的影響」など、自身の関心や生活実感を反映したものが多く見られた。考察においては、批判的視点から課題や反論を挙げ、それらに対して必要な情報を収集し、論証を深めることをルールとして課した。

約1,500字の小論ではあったが、学生は関心のあるテーマに基づいて主体的に情報収集を行い、関係者へのインタビューにも取り組むなど、初めての研究活動に最後まで意欲的に取り組んだ。ゼミ内発表会では、他の学生からの評価や称賛の声が上がるとともに、質疑応答も活発に行われた。学生は自らの結論を導き出したことに達成感を覚え、思考を積み重ねることの楽しさを実感している様子がうかがえた。

このような経験の積み重ねを通して、学生は学ぶことの面白さを実感しながら、着実に論理的思考力を培っていくことが期待される。

○作成した教科書・教材

授業テキスト：「音楽と社会」「音楽科教育法」「幼児と音楽表現」「保育内容（音楽表現）」

○自己評価

目標ごとに自己評価を行った結果、いずれにおいても概ね達成することができた。

まず一つ目の目標についてである。学生の多くは、子ども時代のお稽古事の経験や1年次の実技授業から音楽に対する苦手意識を抱いている。そこで、音楽を狭い価値観で捉えるのではなく、より俯瞰的に理解してほしいという意図から、「生存価」という観点に着目した。その結果、学生の音楽観には一定の変容が見られたものの、根本的な苦手意識の軽減には十分に結びつ

かなかった。保育・教育の現場において音楽の楽しさを伝えられる教師を育成するためには、やはり一定の知識や技能の習得が不可欠である。次年度は、「生存価」を基盤とした考え方を維持しつつ、実際の知識・技能の習得においては、苦手意識の払拭につながるよう指導方法の工夫を図りたい。

二つ目の目標について、学生はそれぞれのテーマに基づき論理的に執筆を進めることができていたが、段落構成や文章表現には依然として課題が見られた。文章を書く力は思考力の基盤であることから、次年度は文章構成の指導と論理的思考力の育成の双方に重点を置き、より効果的な指導の在り方を検討していきたい。

II 研究活動

○研究課題

音楽の同期を取る行為がもたらす演奏者－聴取者間の相互作用の解析

○目標・計画

【目標】

音楽の同期を取る行為がもたらす演奏者と聴取者という1対1の関係における聴覚フィードバックの影響を調べる。

【計画】

実験で得た録音データを信号処理して推定した時刻をもとに、演奏の拍と聴取者の手拍子との同期を統計的に比較分析する。必要であれば、追加実験も行う。これらの研究成果を学会等で発表する。

○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- ・水野伸子「はじめに」『学校音楽教育実践論集 第8号』日本学校音楽教育実践学会，2025年
- ・水野伸子，石井玲子ほか『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」』教育情報出版，第2章 第2節 乳幼児の「表現」の発達特性と発達過程，pp.23-24，2020年
- ・水野伸子，横井志保ほか『表現（新・保育実践を支える）』福村出版，pp.81-87，2018年

（学術論文）

- ・Nobuko Mizuno, Minoru Tsuzaki, Effects of Auditory Feedback on the Synchronization between a Performer and the Audience, The 17th International Conference on Music Perception and Cognition e-Proceedings, pp. 198-203, 2023.
- ・水野伸子「演奏者と聴衆の間の同期の解析：音響情報の双方向性がもたらす効果」令和4年度博士論文，京都市立芸術大学大学院（全105ページ），2023年
- ・水野伸子，津崎 実「演奏者と『聴衆』間の聴覚情報の双方向性が同期に与える影響」（査読有），音楽知覚認知研究 28(1)，日本音楽知覚認知学会，pp.3-19，2022年
- ・水野伸子，津崎 実「演奏者と「聴衆」間の聴覚フィードバックの有無による手拍子同期の比較」情報処理学会研究報告 Vol.2022-MUS-134 No.9(IPSJ SIG Technical Report, Vol.2022-SLP-142 No.9) pp.1-6，2022年
- ・水野伸子，津崎 実「拍知覚における演奏者－聴取者間相互作用の解析」日本音楽知覚認知学会 令和1年度秋季研究発表会資料，日本音楽知覚認知学会，pp.55-58，2020年度

- ・水野伸子, 津崎実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討」（査読有）音楽教育学第 49 巻第 2 号, 日本音楽教育学会, pp.1-12, 2020 年
- ・水野伸子, 津崎 実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討」日本音楽知覚認知学会平成 30 年度秋季研究発表会資料, pp.78-81, 2018 年

(学会発表)

- ・水野伸子「演奏者と聴取者の間の相互作用—音響情報の双方向性が両者の同期にもたらす効果—」日本音楽教育学会第 56 回大会（長崎大学），2025 年
- ・水野伸子「演奏者と聴衆の間の相互作用—同期や同調を促すパラメータに着目して—」日本音楽教育学会第 55 回大会（玉川大学），2024 年
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と聴衆の間の同期：制御機構に注目して」日本音楽教育学会第 54 回大会（弘前大学），2023 年
- ・Nobuko Mizuno, Minoru Tsuzaki, Effects of Auditory Feedback on the Synchronization between a Performer and the Audience, The 17th International Conference on Music Perception and Cognition, The College of Art, Nihon University, Japan, August 24-28, 2023.
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と「聴衆」間の同期に曲による違いが生じる要因の検討」日本音楽教育学会第 53 回大会（国立音楽大学，オンライン開催），2022 年
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と「聴衆」間の聴覚フィードバックの有無による手拍子同期の比較」音学シンポジウム 2022（第 131 回音楽情報科学研究会・第 137 回音声言語情報処理研究会共催研究会），2022 年
- ・水野伸子, 津崎 実「演奏者と「聴衆」間の聴覚情報の双方向性が同期に与える影響」第 32 回音楽の科学研究会，2022 年
- ・水野伸子, 津崎 実「音楽聴取時における演奏の拍と聴取者の手拍子による相互同調の分析」日本音楽教育学会第 52 回大会（京都教育大学，オンライン開催）2021 年
- ・水野伸子, 津崎 実「拍知覚における演奏者—聴取者間相互作用の解析」日本音楽知覚認知学会令和 1 年度秋季研究発表会（ZOOM 開催），2020 年
- ・水野伸子, 津崎 実「音楽聴取時における演奏者—聴取者間の相互作用による同時性の解析」日本音楽教育学会第 51 回大会（オンライン開催），2020 年
- ・水野伸子, 津崎 実「拍知覚における演奏者—聴取者間相互作用の解析」日本音楽知覚認知学会令和 1 年度秋季研究発表会（ZOOM 開催），2020 年
- ・Nobuko Mizuno, Minoru Tsuzaki, The Perception of the Musical Beat among Japanese Young Children: Aspects of the Degree of Synchrony, International Symposium on Performance Science, Melbourne Conservatorium of Music, 2019 July 19.
- ・水野伸子「幼児期における拍の知覚発達：音楽聴取時の手拍子同期度による検討」日本音楽教育学会第 49 回大会（岡山大学），2018 年
- ・水野伸子, 津崎実「幼児期における拍知覚の発達：同期度による検討」日本音楽知覚認知学会平成 30 年度秋季研究発表会（龍谷大学）2018 年度

○科学研究費補助金等への申請状況，交付状況（学内外）

- ・基盤研究（C）（2023 年～2026 年）「音楽の同期を取る行為がもたらす演奏者—『聴衆』間の相互作用の解析」（課題番号：23K02420）研究代表者 水野伸子
- ・基盤研究（C）（2019 年～2022 年）「音楽聴取時における演奏者—聴取者間の相互作用の解析：拍への同期度による検討」（課題番号：19K02769）研究代表者 水野伸子

- ・基盤研究(C) (2016年~2018年) 「音楽的発達と音楽的文化化の観点から検討した幼小連携リズム指導カリキュラムの開発」 (課題番号: 16K04176) 研究代表者 水野伸子

○所属学会

日本音楽教育学会, 日本音楽知覚認知学会, 日本教育工学会, 日本学校音楽教育実践学会, 日本保育学会

○自己評価

今年度の主な成果として, 6月に開催された音楽知覚認知学会研究会において, 「音楽知覚認知研究」第28巻第1号に掲載された自身の論文が論文賞を受賞したことが挙げられる。これまで音楽発達心理学および音楽認知心理学の分野で研究を積み重ねてきて, 本学会における受賞は大変光栄なものであった。

また, 科学研究費補助金(基盤研究C, 課題番号: 23K02420)による研究は3年目を迎え, 一部データの分析を進めることができた。ただし, 研究のさらなる深化のためには期間の延長が必要と判断し, 延長申請を行った結果, 3月19日に補助事業期間の延長が承認された。次年度において研究の完了を目指す。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

教育学部長補佐として学部長をサポートし, 学部運営の円滑化に寄与できるよう努める。また, 広報委員会の委員として大学の広報業務を担い, 適切に遂行する。さらに, 学生が充実した学生生活を送り, 勉学に専念できるよう支援するとともに, その成果や姿を積極的に学外へ発信していく。

【計画】

学部長補佐として, 教授会の司会を含め, 学部の諸活動が円滑に進むよう努める。また, 広報委員会の委員としては初年度であることを踏まえ, 委員会の活動内容の把握に努めるとともに, 教育学部の委員として責任をもって業務を遂行する。

○学内委員等

教育学部学部長補佐, 教育学部部会, 広報委員会, 相談員

○自己評価

教育学部長補佐として, 学部長の指示のもとに教授会の議事進行をはじめとする教学運営や学生支援に取り組んだ。業務の遂行にあたっては, 学部長が円滑にリーダーシップを発揮できるよう配慮した。また, 広報委員としては, 今年度は大学のブランディングの見直しを行なった。学部内におけるブランディングへの意識については, 今後も継続的に働きかけていく必要がある。さらに, 相談員として, 相談対応および関係部署との連絡調整を迅速に行い, 円滑な支援体制の維持に努めた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

保育者・教育者の研修や試験業務に携わり社会に貢献する。

【計画】

保育士資格試験採点委員（7月，12月）

○学会活動等

日本音楽教育学会第56回大会において，科研費の助成を受けた研究の成果を発表するとともに研究者らと意見交換を行なった。日本学校音楽実践学会第30回全国大会において分科会「自由研究12」の司会を担当した。二つの学会において，学会誌投稿論文の査読を担当した。

○地域連携・社会貢献等

ドキュメンタリー「生きる 大川小学校津波裁判を闘った人たち」の本学における自主上映会および，ZOOM会議システムを用いた出演者とのトークイベントを，ゼミ学生とともに企画・運営した。当日は，教育学部の学生や教職員に加え，地域方々にも参加いただき，学内外をつなぐ意義のある機会となった。

○自己評価

学会活動においては，分科会の司会や学会誌投稿論文の査読を担当し，これまでの研究成果を活かす貴重な機会となった。あわせて，全国保育士試験では採点委員を務め，微力ながらその運営に貢献することができた。

V その他の特記事項（学外研究，受賞歴，国際学術交流，自己研鑽等）

自身のピアノ演奏力の研鑽にも努め，社会貢献活動を行う。

○受賞歴

・日本音楽知覚認知学会 論文賞（2025年6月15日）

「演奏者と「聴衆」間の聴覚情報の双方向性が同期に与える影響」（音楽知覚認知研究 2022年 第28巻 第1号）

VI 総括

大学教育は自身の研究を基盤としつつ，分かりやすい指導は教育方法の工夫と豊かな人間性に支えられるものである。今年度は，自身の論文が論文賞を受賞したほか，学会誌投稿論文の査読を担当するなど，これまでの研究成果が評価された一年となった。

また，学内における相談員としての業務は，他者からの信頼に基づいて初めて成り立つものであり，今後もいっそうの研鑽が求められると認識している。

次年度も音楽知覚認知に関する研究を継続し，その成果を学内の授業および社会へ還元していきたい。さらに，教学運営においては学部長を補佐し，学部の活性化に寄与できるよう努める。

以上